

ひこ
まち

サンマで復興支援

9月9日、川越市自治会連合会主催の「がんばろう東日本復興応援団 東北秋の味覚まつり」(以下「まつり」)が埼玉川越総合地方卸売市場で開催されました。東北地方の復興支援のために、焼きサンマの無料提供、物産販売のほか各種イベントが行われました。同連合会としてイベントを実施するのは、今回が初めての試み。その舞台裏には多くの人の協力と努力がありました。



焼きたてのサンマを求め長蛇の列ができました

「サンマを食べて広げよう支援の輪」をテーマに開催されたまつり。「東北地方の復興支援のために自治会連合会としてできることは何かを考えた企画しました。サンマの提供の際には、たくさんの方の皆さんとの交流を図りながらまつりを盛り上げたいです」と話すのは、同連合会会長の栗原博司さん(岸町一丁目)。用意したサンマは、5000匹。その仕入れは、会場となった同市場に協力を依頼。担当した水産会社に



5,000匹の生サンマ



リハーサルの様子



約270人のスタッフがサンマの提供にあたりました。

長・齋藤實さんは、「今年度はサンマの漁獲量が少ない中、岩手県大船渡市の漁港から生のサンマを手配することができました。多くの方に旬の味覚を味わってもらうことで復興支援につなげたいですね」。実行委員長の櫻井晶夫さん(並木)は、「市場をはじめ多くの方の協力をいただいています。全てが初めての経験だったので、5000匹もの焼きサンマを提供するために、黒区役所を訪ね「目黒のさんま祭り」の実行委員会の方に、焼き方などを教えてもらいました」。また、事前に行われたリハーサル



まつりを盛大かつ安全に実施するため何度も会議が行われました

では、自治会の各支会から約80人が参加。「サンマをきれいに焼くために網を乗せる台を高くし、炭とサンマとの距離を確保するなどの工夫をしました」と櫻井さん。市保健所の立ち会いのもと、手洗いの徹底や、食品の取り扱いなどについて衛生管理に関する指導も行われました。快晴となったまつり当日、約2万人が訪れ会場は熱気に包まれました。焼きサンマのほか、炊き出し訓練として作った豚汁2500杯を無料提供しました。また、同市場の青果会社が袋詰めしたフルーツなど600袋を提供し、子どもたちにも無料で配りました。

「サンマとってもおいしい」と笑顔で話す岩崎琴美ちゃん(熊野町・下写真)。今食べているのが東日本大震災の被災地である大船渡から仕入れたサンマだと知ると「みんな早く元気になってほしいな」。



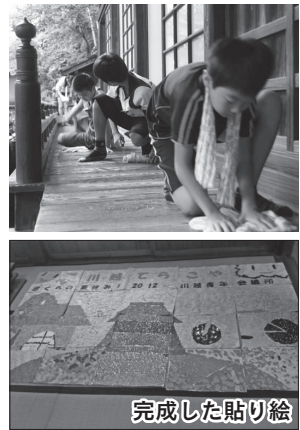
市自治会連合会が初めて実施した今回のまつり。自治会や市民の皆さんなど、参加したすべての人の思いがひとつになって、被災地東北に届けられました。

夏の思い出「川越てらこや」

(社)川越青年会議所主催で8月18日から1泊2日で行われた「川越てらこや」には、市内外から約70人の小学生が参加。子どもたちは川越の魅力を感じながら、助け合いの心、やり遂げる力を育むことを目的に、中院に宿泊し、さまざまな体験をしました。

集まった子どもたちは、グループに分かれ、お寺体験として座禅を組んだり、境内の清掃をしたりしました。兄弟で参加した大井智翔さん(小学6年・六軒町)と鈴雄さん(小学5年)は「座禅を組むのは初めて。足がしびれたけど、お寺はとても静かで集中できました。また参加したいです」。

また、グループの班長を中心に



完成した貼り絵

協力して貼り絵を制作。各班で作った20枚の絵をつなぎ合わせて作品が完成しました。夜には、ライトアップされた川越のまちを散歩し、途中で銭湯へ立ち寄る「川越ナイトウォーク」が行われました。2日目の朝食は野菜や穀物中心の食事を体験。また約30kmを自転車で回るチャレンジサイクリングに挑戦しました。

「会場を提供して頂いた中院や市内の大学生、ボランティアなど多くの方の協力により実施できました。子どもたちには、今回の経験をを通して川越をより好きになってもらいたいです」と話すのは同会議所の山口貴正さん。

夏休みに貴重な体験をした子どもたちの思い出が詰まった貼り絵は、10月31日(水)までP・i・K・O・A(鯨井)に展示されています。



小江戸ある寺

行って 会って 体験
気になるイベントや人を紹介



川越と横須賀、

時代を超えたつながり

日本近海に外国船が姿を現すようになった幕末期。時の川越藩主・松平大和守家は、現在の三浦半島に領地を有していたため、その沿岸を防備することになりました。天保14年(1843)、川越藩は現在の横須賀市大津に陣屋を建設し、十石崎・猿島などに台場(砲台)を設置。この大津陣屋は約3・2ha、最盛期には1500人ほどが暮らしていました。



川越を訪れた大津観光協会の皆さん

平成16年に横須賀市の大津行政センター市民協働事業として発足した「大津探訪くらぶ」。当初から、幕末期の江戸湾警備の拠点である大津陣屋について調査を始めました。川越藩士やその家族の中には、再び故郷の地を踏むことなく亡く

なった方もいました。同くらはぶは現地調査して22基の墓を確認。「大津陣屋は分らないことがたくさんあります。日本を守るため活躍した先人の歴史を、多くの人に知ってほしい」と同くらはぶ代表の杉本幸三さん。これまでに会員15人で約1000点の資料を収集。その成果は、昨年3月に大津観光協会(増田茂会長)が主催し「黒船来航 大津陣屋と川越藩」と題した展示会になりました。その一部を、11月2日(金)まで市立博物館ギャラリーで展示中です。

川越での展示を契機として、9月8日に大津観光協会による川越訪問バスツアーが実施されました。喜多院・川越城本丸御殿・一番街などを見学し「川越にはすばらしい歴史財産がありますね」「これを機に、両市の交流を深めたい」と同協会の皆さん。川越と横須賀、まち同士のつながりに期待が寄せられています。



本丸御殿の大広間で

の交流を深めたい」と同協会の皆さん。川越と横須賀、まち同士のつながりに期待が寄せられています。